

保育者志望学生のメンタルヘルスと職業意識に関する予備的分析

西山 修
鎌野 智里*

The Preliminary Analysis on
Mental Health and Occupational Awareness of Students Majoring in Nurturing

Osamu NISHIYAMA & Chisato KAMANO

Abstract

In this study, the relation between the ego identity status as the guideline of the mental health and the occupational awareness of the adolescent women is examined. Specifically, the relation between their ego identity status at the time of entering the college and their occupational awareness expressed by free description, based on Sentence Completion Test, is examined on the students who are majoring in nurturing.

Their free descriptions about occupational awareness are analyzed in the form of multidimensional data by using Word Miner Ver.1.1. As a result, the description gap is seen clearly depending on the ego identity status; it becomes clear that the formation of the ego identity largely reflects on their occupational awareness. These research points are combined with the result of precedence study and added a little consideration; the next analytic procedure is confirmed.

Key words: Occupational Awareness, Mental Health, Ego Identity, Students Majoring in Nurturing

保育者養成あるいは初任期にあたる青年期後期は、アイデンティティ (ego identity; 以下、自我同一性とする) 獲得という発達上の課題に直面する時期でもある。保育者 (幼稚園教師及び保育士) にとってこの時期の課題は、「保育者としての自分をどのように決定し、保育職にどのようにかかわっていくか」、「保育という職を通して自分らしさをいかに生かし育むか」という、いわば社会に対する公的な自己定義の課題とも言える。一方、いじめ・学級崩壊等の教育問題や虐待、育児不安など子育てに関する問題の深刻化のなか、就学前教育・養護にかかわる保育者に求められる力量は増すばかりである。筆者らは、しっかりと子どもの発達を支え援助していくこれからの保育者には、専門的知識・技能の修得のみならず、「保育者自身の精神的健康や自我の成長・発達」を志向した養

*元真備町立真備東中学校

成・研修が不可欠であると考える。

このような観点から、本報告では保育者志望学生を対象にメンタルヘルスと職業意識との関係を予備的に検討する。具体的には、メンタルヘルスの一指標として自我同一性形成を取り上げ、大学入学時における職業意識との関係を検討し、保育者としての自我の成長・発達を考える一資料を提出するものである。

「自我同一性」の概念が、Erikson (1959) によって示されて以来、この概念は青年期の発達を捉えるキー概念とされてきた。近年この概念は、青年期のみならず中年期以降をも射程として展開し、生涯発達の観点からも重要視されている (岡本, 2002)。自我同一性は、「真の自分であること」、「正真正銘の自分」、「自己の存在証明」などと換言することができる。人間は誕生以来、自我の発達の途上で、親、友人、教師等との対人関係の中で社会化されながら、自分にとって重要な他者や自分の所属する集団に自分を同一化させる試みを繰り返し行っている。そして青年期後期になると、それ以前の全ての同一化や自己像をとらえ直し、新たに社会との関連で選択し統合して、ひとつの独特で首尾一貫した全体として作り上げ、自我同一性が形成されていく (無藤, 1979)。

しかしながら青年期の自我同一性獲得は決して容易なものではない。Erikson (1959) は、青年期における心理社会的危機 (ここでいう危機は葛藤を伴うような自己の発達のための決定的な契機を指す) として、「同一性達成 対 同一性拡散」を挙げる。同一性達成 (identity achievement) とは、過去の自分についての葛藤を伴いながらも統合し、それに基づいて一定の価値観やイデオロギーを自分の意志で選択し、それに積極的に関与している状態である。これに対して、同一性拡散 (identity diffusion) とは、「自分は何者か」、「何をしたいのか」、「どこに進めばよいか」等がまったく焦点づけられず、拡散し、混乱した状態を指す。その臨床像としては、自意識の過剰さ、職業選択や心理社会的自己定義の回避と麻痺、注意集中の困難、対人的距離の失調、切迫感や時間意識の喪失、否定的同一性の選択などが挙げられる。

ところで近年、社会に参画することを拒み、人間関係から退く「ポスト青年期」の諸問題が社会問題化している (宮本, 2002)。推定100万人とも言われる社会的引きこもりもその一つであり、最近ようやく社会的関心が寄せられるようになってきている。この「引きこもり」には、従来から性差が指摘されており、女性に比べて男性が多いといわれてきた。これは男性の場合、就業や就学など何らかの社会的活動に関わっていなければ社会的に非難されやすいのに対して、女性の場合はいわゆる「家事手伝い」といった形で、必ずしも積極的に社会参加をせずとも周囲から認められやすいことが影響しているという (斎藤, 1998)。しかし、最近のネット相談による統計では女性4割という数字もあり¹⁾、潜在的には女性も相当数存在するものと考えられる。そして何より、女性をめぐる社会参画への期待や社会的役割の変化を鑑みるとき、今後、女性が生き生きと生活を営む上で、「社会参加としての職業をどのように捉えるか」という点は、男性とかわらず焦眉の課題となる。

今日、高学歴化、晩婚化・非婚化等の女性のライフスタイルの多様化は急速に進み、既に女性にとっての青年期の持つ意味を大きく変えている。女性の職業人生の在り方にも大きな影響を及ぼしている。そして、これから就業し本格的に社会参加しようとする青年期女性の職業意識にも多大な影響を及ぼしていることが予想される。果たして保育者志望学生らは職業をどのように捉えているのであろうか。

保育者の専門性とは何か、保育者養成に求められるものは何かという議論のなかで、保育者の自我同一性の重要性を指摘する声は多いが (e.g., 森上, 2000)、実証的な研究はほとんどないのが現状である。他方、女性の職業的同一性に関する研究は80年以降急増しているもの (e.g., Baker, 1987; Forrest & Mikolaits, 1986; Garfunkel, 1985)、我が国ではこの領域の研究成果は少なく、保育という職業と自我同一性形成を取り上げた研究になると皆無に等しい。そこで本報告では、青年期女性の自我同一性と深くかかわると考えられる「職業意識」に焦点をあて、同一性地位との関連を検討し速報的に報告する。

目 的

保育者志望学生が入学期に抱く職業意識を明らかにする。このとき同一性地位判別尺度 (加藤, 1983) を用いて彼女らの同一性地位を求め、職業意識と同一性地位との関係を探索的に把握する。また今後の本調査に向けて、予備的に分析手順を確認する。

方 法

調査対象

関東、中国地方の短期大学3校において調査を実施した。調査は各大学の担当教員に依頼し、講義中に無記名集団式で行った。この際、十分な記入欄と時間を取るよう配慮した。全被調査者のうち、男性及び社会人入学者等の年長者 (21歳以上) を除き、後述の分析に必要な質的質問項目すべてに回答のあった412名を分析対象とした。

被調査者はすべて1年次生の女性であり、保育者養成課程に在籍する学生である。一般に保育者志望学生は、ある程度の目的意識をもって進路を決め、入学している。しかしながら一部には他大学他学部の受験に失敗し、いわゆる不本意入学をした者や一応の進路希望はあるものの進路選択に悩む者も少なくない。このような学生像を有する保育者志望学生が、自我同一性地位によって如何なる就職意識の相違を示すのか注目したい。

調査時期

調査は2002年、2003年の2回、いずれも入学から約1ヵ月が経過した5月に実施した。この時期を含めた入学期 (入学後1年) は、新しい環境での適応や、物理的・心理的に家族から離れ親子関係を見直すことなど移行に関する課題を抱え、学生相談に訪れる学生がもっとも多い時期でもある (鶴田, 1998)。

調査内容

職業意識を問う質問には文章完成法(Sentence Completion Test；以下、SCT) に準じたものを用いた。SCTは、曖昧かつ省略された未完成文章（刺激文）に対する自発的表現によって被検者の総合的な理解を図ろうとする心理検査であり、何を連想するかという点に無意識が関与する、投影法の一つとされる（小林，1999；佐野・楨田，1960）。ここでは職業意識について広範かつ厚みのある回答を得るためこの手法を援用した。

具体的な質問には、①私は仕事__（職業意識全般について広く引き出す質問）、②職場では__（職場への具体的な期待や不安、イメージ等を引き出す質問）、③職業について私がいま悩んでいるのは__（将来の就職についての悩みや不安の具体的な記述を得るための質問）を設定した。この他、質問紙には同一性地位判別尺度（加藤，1983）12項目、及びフェイス・シート（年齢、性別）等を記載した。

結果と考察

同一性地位論はMarcia（1964，1966）によって提唱された研究パラダイムである。本邦では加藤（1983）による同一性地位判別尺度などが広く用いられている。加藤（1983）の尺度は、一般的な「現在の自己投入」の水準、「過去の危機」の水準、「将来の自己投入の希求（現在の危機）」の水準という3変数を測定し、その結果から被調査者を6つの同一性地位に分類するものである。それらは4つの典型地位である、①同一性達成地位（Achievement）：過去に高い水準の危機を経験した上で現在の高い水準の自己投入を行っている者、②権威受容地位（Foreclosure）：過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者、③積極的モラトリアム地位（Moratorium）：現在は高い水準の自己投入を行っていないが、将来の自己投入を強く求めている者、④同一性拡散地位（Diffusion）：現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱い者、さらに2つの中間地位である、⑤同一性達成－権威受容中間地位（Achievement-Foreclosure；AF中間）、⑥同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位（Diffusion-Moratorium；DM中間）を指す。本研究ではこの尺度を用いて被調査者を6つの同一性地位に分類した。その結果、分析対象者412名の内訳は同一性達成24名、AF中間52名、権威受容15名、積極的モラトリアム16名、DM中間280名、同一性拡散25名となった。

職業意識に関する自由記述の分析には、(株)日本電子計算のWord Miner Ver.1.1を用いた。本ソフトは、テキスト型データの分析に適しており、選択型設問や被調査者の属性情報などの質的変数を併用しながら、定性情報の構造的な特徴や関連を明らかにする、探索的な多次元データ解析が可能である。

分析にあたってはSCTによる3つの自由記述を結合し、1つのテキスト型データとした。漢字と平仮名、文法的に誤った表現等もそのまま活かし、原則として全て学生の記述のまま分析に使用した。まず自由記述文に分かち書き処理を施し、構成要素（ほぼ単語に相当）に分解した。分解済の構成

表1 同一性地位ごとの職業意識に関する自由記述例

-
- ・私は仕事を早くしたいです！子供達に囲まれて毎日楽しく生活できたらすごく幸せです。職場では人間関係等、難しい事悩む事が多くあると思いますが、毎日、明るく楽しく仕事を頑張りたいです。講義を受けるたび私は本当に頑張れるのかという不安がつのります。その不安と同じくらい早く幼稚園教員になりたいという期待もあります (同一性達成地位)
 - ・私は仕事に対して、しっかりとした目標をもって、自信を持って頑張りたい。日々成長できる仕事をしたい。自分らしさを忘れずに、職場の人と協力しながら働きたい。勉強がむずかしい！！ (AF中間地位)
 - ・私は仕事に早くついて、親を楽にしてあげたい。職場ではとても楽しく仕事をしたいです。悩みは全くないです (権威受容地位)
 - ・私は仕事は、自分の為にするものだと思う。保育士を目指しているのにこんなコトいっちゃいけないかもしれないけど、私は私の幸せの為にがんばりたい。職場では本当の自分をだしていけるようになりたい。今の悩みは、自分が本当に保育士になりたいのかわからなくなることがある。小さい頃から言ってたことだけど、本当に私は保育士になりたいのかな (積極的モラトリアム地位)
 - ・私は仕事に就けるかどうか心配。職場では楽しくやっていきたい。悩みはどんな職場に就こうかということ (DM中間地位)
 - ・私は仕事は何をするのだろうか？職場ではちゃんと仕事をこなしていきたい。自分にはどんな仕事合うんだろう？ (同一性拡散地位)
-

注) () 内は6つの地位を表す。必要に応じて「私は仕事」「職場では」「悩みは」など語句を補足している。

図1には112の構成要素(単語)が薄字で布置され、アンダーラインのある太字で6区分(自我同一性地位)が布置されている。ここで、原点周辺部の単語、群名は一般性が高いといえ、逆に原点から離れた単語、群名は特殊性が高いといえる。またより距離的に近い構成要素や群は、自由記述内容の解析によって関連が強いことが示されている。以下では、図1の布置図を中心に同一性地位及び職業意識との関連を概観する。ただし、中間地位は定義が十分に確立されていない(大矢, 1999)ことから、以下の考察では、「同一性拡散地位」、「積極的モラトリアム地位」、「同一性達成地位」及び「権威受容地位」を中心に取り上げ、同一性地位と職業意識との関連をみる。また、図中の112単語については、単語が実際に自由記述でどのように使われているか分析を行い(コンコーダンス分析)、確認しつつ考察を進める。

まず注目すべきは、職業意識に関する自由記述の分析によって各同一性地位を布置したとき、「同一性拡散地位」、「積極的モラトリアム地位」、「同一性達成地位」及び「権威受容地位」が明確に各象限に分かれて布置され、「AF中間」、「DM中間」の2つの中間地位が関連する地位に隣接して布置されている点である。このことは職業意識と自我同一性形成に深い関連性があり、それぞれの同一性地位によって職業意識についてかなり異なった意識を有していることを示している証左と言えよう。次に各群の特徴を整理したい。

同一性達成地位では、「できる」、「職場」、「考えて」、「毎日」、「職」、「就職」、「やりがい」、「いいな」など就職への具体的な願望やライフスタイルへの言及、就職したい動機づけの高さ等が伺える。都筑(1993)は、自我同一性の達成は、過去、現在、未来の時間的流れの中で自己についての継続性や統合性の意識の上に始めて成り立つものであるという観点から、大学生を対象に自我同一性と時間的展望との関係を検討している。その結果、同一性地位では、過去・現在・未来を最も統合させた形で捉えており、未来を変化に富み、重要なものとしてイメージする未来志向的な点に特徴を見出している。上記の単語との関連は同一性地位の安定した自我状態を反映しているとともに、就職という未来の出来事に対して最も具体的なイメージをもっている様子が伺える。

同一性拡散地位では、「まだ」、「仲間」、「職業」、「夢」、「自信」、「私」、「だろう」などの特徴的な単語との関連を挙げることができる。これらの同一性拡散地位との関連の強い単語について、個別にコンコダンス分析を行ったところ、「自信がない（傍点は筆者付加。以下同じ）」「夢は先生だけと本当に向いてるのかな」「どの職業に就くか悩んでいる」などいずれもネガティブな職業意識を表す文脈で使用されやすいことがわかった。従来¹の知見からは、同一性拡散にある者の一つの特徴として、選択や決断において葛藤を引き起こし、職業選択や心理的社会的自己定義を回避する状態が挙げられている（岡本，1999）。また「自分」意識が不確実で、「あれも自分」「これも自分」という意識があり、どれが本当の自分か確信がもてない（鐘，1990）といわれる。漠然とした職業意識を持ちつつも、それに積極的に傾倒しない（できない）現在の状態が本結果からも示されたといえよう。

権威受容地位は「早期完了型」とも呼ばれる。過去に危機の経験がないか、低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者を指し、自分の目標と親の目標との間に不協和がないこと等を特徴とする。権威受容地位は、場合によっては青年期平穩説の引き合いに出されるように、親との対立もない「何の悩みもない健康青年」であるかのようなイメージを与えられることもある（杉原，1988）。しかしながら、表面的な健康さとは裏腹に、潜在的な拡散傾向を示唆する事例もあり、臨床上の配慮を要する群と考えられる（加藤，1990；杉原，1988）。この権威受容地位では、「なれる」、「思っ^て」、「行動」、「子ども」、「周り」、「両立」、「早く」、「一生懸命」などの単語との関連が示された。一般的に「よい子」的、「お手本」的な職業人生を想定した記述が多い。

積極的モラトリアム地位では、「いない」、「わからない」、「大切」、「なし」、「いつも」、「仲良く」、「向いている」、「卒業」などの単語と関連の強さが示された。この積極的モラトリアム群は、6つの同一性地位のなかで最も自己形成における危機体験を顕著に示す群と考えられる。またこの群は、明確な自己投入の対象を主体的に獲得しようとして、危機の最中、積極的な努力を行っている群と定義される。現在、いくつかの選択肢の中で悩んでいるが、決定的な意思決定を行うことができないために、行動のあいまいさが見られ、その不確かさを克服しようともしている。関連がみられた単語について個別にコンコダンス分析を行ったところ、「同僚と仲良くしたい」「仕事も大切にしたい」などの記述の他、「保育士に向いているのか不安だ」「卒業してからどうするか悩んでいる」などの文脈で使用されていることがわかった。ここで強い関連が示された単語は、積極的モラトリアム地位に特有の、不確かさ、迷い等を顕著に表しているといえよう。

以上、本報告では保育者志望学生の職業意識を自我同一性形成の観点から検討し、両者の関係を探索的に把握することを目指した。職業意識に関する自由記述は構成要素に分解され、主要な構成要素を対象に布置図を作成し、コンコダンス分析と併せて、各群の特徴を記述した。その結果から、自我同一性の形成が職業意識にも大きく反映されることが明らかになった。今回は被調査者数が少ない地位群があることや、予備的に分析手順を確認することを目的としているため、詳細な考察は

以後の結果と併せて報告したい。

なお今後の研究における目的の一つは、女性の働き方の多様化、職業意識の変化の中で、保育への職業意識の発達や葛藤、自我同一性等がどのように結びついているのかを示すことである。近年、青年期女性のなかには同一性拡散を示す者が少なくない。不透明かつ流動的な現代社会の中で、自我同一性獲得という課題は益々困難かつ重要なものになっている。保育は子どもとの関係のみならず、保護者、同僚、地域等との関係の中で実施される。保育者という職業人としての役割を与えられ、多様な人間関係のなかに置かれたとき、安定した個（自我同一性）を自覚できるか否かが極めて重要である。一連の研究では、現代の保育職に特有な自我同一性の形成過程を示し、保育者が豊かな人間性を備えた「人」へと成長していくことを促す要因、妨げている要因は何かについて考察し、一人でも多く、真の専門性を備えた保育者が実践現場に増えていく方策を考えたい。

注

- 1) 日本放送協会ホームページ「ひきこもりサポートキャンペーン」より引用した
<http://www.nhk.or.jp/hikikomori/abc/index.html>

引用文献

- Baker, D.R. 1987 The influence of role-specific self-concept and sex-role identity on career choices in science. *Journal of Research in Science Teaching*, 24, 739-756
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. 小此木啓吾訳
編 1973 自我同一性 誠信書房
- Forrest, L. & Mikolaitis, N. 1986 The relational component of identity: An expression of career development theory. *Career Development Quarterly*, 35(2), 76-88.
- Garfunkel, G. 1985 The improvised self : Sex differences in artistic identity. *Dissertation Abstracts International*, 45(7-B), 2295.
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 20-30.
- 加藤 厚 1990 アイデンティティ・ステータス 國分康孝編 カウンセリング辞典 誠信書房, P.3.
- 小林哲郎 1999 SCT 氏原寛・小川捷之・近藤邦夫・鐘幹一郎・東山紘久・村山正治・山中康裕(編)
カウンセリング辞典 ミルヴァ書房, P.58.
- Marcia, J.E. 1964 Determination and construct validity of ego identity status. Unpublished doctoral dissertation, Ohio State University.
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego identity status. *Journal of Personal and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 宮本みち子 2002 若者が『社会的弱者』に転落する 洋泉社
- 森上史朗 2000 保育者の専門性・保育者の成長を問う 発達, 83, 68-74.

- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178-187.
- 岡本祐子 1999 アイデンティティ 氏原寛・小川捷之・近藤邦夫・鐘幹八郎・東山紘久・村山正治・山中康裕(編) カウンセリング辞典 ミルヴァ書房, P.5-7.
- 岡本祐子 2002 アイデンティティ生涯発達論の射程 ミルヴァ書房
- 大矢泰士 1999 自我同一性地位と青年期の個体化過程 集団施行TATに見る親表象との関係から 心理臨床学研究, 17, 333-341.
- 斎藤 環 1998 社会的ひきこもりー終わらない思春期 PHP研究所
- 佐野勝男・横田 仁 1960 精研式文章完成法テスト解説ー成人用ー 金子書房
- 杉原保史 1988 自我同一性地位における早期完了型について:一事例に基づく考察 心理臨床学研究, 5, 33-42.
- 鐘幹八郎 1990 同一性拡散 國分康孝編 カウンセリング辞典 誠信書房, P.409
- 鶴田和美 1998 学生生活とアイデンティティ形成 河合隼雄・藤原勝紀(編) 学生相談と心理臨床 金子書房, P.79-88.
- 都筑 学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.

2003年10月31日受付
2003年12月25日受理